

## 第 17 分科会「里山と教育」

テーマ：里山環境を復元した学校ビオトープ・環境教育と生物多様性保全・・・

日時：2008年5月10日(土) 午後1時30分～4時30分

会場：千葉県立船橋芝山高等学校第一会議室と芝山湿地

参加者数：42名

スタッフ：佐野郷美（船橋芝山高校職員）、科学研究同好会



趣旨：自然環境の著しく失われている都市部では、学校ビオトープが生物多様性保全を担う場、そして子供たちの環境教育のフィールドとして重要である。しかし、学校ビオトープは、熱心な教職員の異動等により、その環境を維持していくことが難しいのが現状である。どのようにすれば学校ビオトープを地域の生物多様性保全の場、永続的な環境教育のフィールドにできるかを検討した。

発表者、発表題目、所属団体：

船橋芝山高校科学研究同好会、「里山生態園『芝山湿地』の整備の経過と現状」  
千葉県立船橋芝山高等学校

現状、課題など

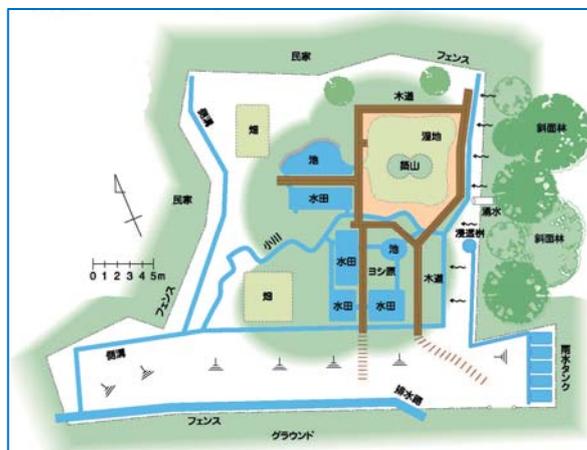
### (1) 本校のビオトープ「芝山湿地」の整備の経過と現状

本校の里山生態園「芝山湿地」は、かつてのこの地域の谷津田の一角で、本校創立以来約20年にわたり放置されヨシ原湿地になっていた場所を、1999年に理科職員とその呼びかけで集まった教員や生徒の有志で、かつての里山の環境に復元したものです。面積は約600㎡、ちょうど小学校の25mプール二つ分位の面積です。幸い湿地に接して船橋市の保存樹林があって、その下から湧水が流れ出ていたので、それを水源として小川、池、水田、湿地などの多様な水辺を復元し、地下水位の低い側には草地、畑地をつくり、湿地全体を観察できるように尾瀬のような木道を整備しています。

里山環境が復元されるにつれて自然にこの地に入り込んできた生物たちも多いのですが、いくら待っても自然には入り込んでこないであろう里山を代表する生物のメダカ、ニホンアカガエル、カワニナ、ヘイケボタル等については、移入元を明らかにして人為的に持ち込みました。それらはこの地にしっかりと定着し、それらも含め、現在ではこの小さな学校ビオトープに千葉県レッドデータブックに掲載されている絶滅危惧種が25種も確認されるほどになっています。

芝山湿地は整備をはじめて今年で10年になりますが、里山環境を維持しながら、授業で活用し、同時に地域の生物多様性を保全する場として継続できているのは、教職員の人事異動に際して、学校ビオトープを維持発展させるための人選が行われたからです。たぶん校内の自然環境を維持するために人事面で配慮されたのは、全国的にも珍しい事例といえると思います。

分科会当日は、まず本校の科学研究部の生徒により、芝山湿地の整備の経過と現状、生息する生物などについてスライドで紹介し、その後現場を見学していただきました。キンランが咲き、湧き水近くに生息するサワガニ、オニヤンマのヤゴ、池、水田のメダカ、ニホンアカガエルのオタマジャクシなどを観察し、ここが船橋地域の生物多様性を保全している大切な場所であることを確認しました。



## (2) 学校ビオトープの課題

後半の話し合いでは、せっかく良好な環境を保つ学校ビオトープができて、担当者が異動するとビオトープが放置され、教育活動にも生かされなくなり、その結果生物多様性も失われしまうことが多いことが報告されました。したがって、一度作ったビオトープをいかに維持するかが課題であること、そのためには県教育委員会や各市町村教育委員会が良好なビオトープの作られている学校の人事異動については特別な配慮をする必要があること、また、地域住民や地域のNPO, NGOとの連携で維持されている学校ビオトープは、担当教師が異動しても継続できる可能性が高く、学校ビオトープの維持には地域との連携がカギになることを確認しました。幸い本校の芝山湿地は、周辺自治会の有志からなる「芝山十町会まちづくり協議会」の皆さんが昨年より湿地および校内斜面林の復元にも関わってくださり、また、転勤した先生、卒業生も未だに関心を寄せてくださっています。その点について、参加者が高く評価してくださったので、県内の学校ビオトープの中では、最も成功している事例のひとつとして、そのノウハウを今後広く発信していく必要があると感じました。



また、今年3月末に千葉県が策定した「生物多様性ちば県戦略」の具体的施策として、学校ビオトープの設置、改修を進め、地域の生物多様性の維持に生かし、あわせて環境教育のフィールドにしていくことを目的に事業化された「生物多様性体験学習推進事業補助金制度」についても話し合いました。特に、ビオトープ整備を事業化するとき各学校が自己資金を3分の1準備しなければならないというのはお金の出所がない学校にとって申請しにくい、日々維持管理する必要から、設置年度以降も小額でもいいので継続的に予算がつく仕組みが必要、この事業でせっかくつくったビオトープも、継続的に維持管理するためには別の手立て（前述の人事面での配慮など）も必要、などの意見が出され、県も今後検討したいと述べました。

なお、この日お忙しい時間を割いて堂本知事が芝山湿地を見学し、分科会の冒頭で挨拶されました。わざわざ知事が見に来てくれたことで、生徒も地域住民の芝山十町会まちづくり協議会の皆さんも本校芝山湿地がとても大切な場所であることを再認識してくれたようです。

### まとめ：

県内のすでに設置済みの学校ビオトープの一部は、担当職員の人事異動等で放置され、生物多様性を維持できなくなり、教育活動にも活用されなくなっている。

この問題を解消するためには、県の学校ビオトープの設置・改修に補助金を出す制度も含めて考えると、設置年度だけでなく継続的に予算をつけること、担当職員の人事面で配慮すること、地域住民やNGOとの連携を進めること等が必要がある。

